朝鮮語授業の実践と反省
―選択必修４年間の経験

石坂　浩一

はじめに

立教大学では1997年度から朝鮮語が選択必修の言語科目になった。それまで10年ほどの自由選択科目としての時代と比較してみると，やはり制度的に学習の動機付けと成果保障がなされていることの意味の大きさを感じる。

1990年代初め，初級の週１回の授業は開講当初十数人だったが，90年代半ばには30人前後となっていた。韓国やその言語についての関心が高まり，学ぼうとする学生がふえたのである。しかし，自由科目の時代には選択者の大部分が４年生だった。卒業に必要な科目をとり終わってから，朝鮮語を選択したわけである。４年生中心だと，就職活動などで必然的に人数は減少していく。学年末に常連が５人も残らないというのは90年代初めも半ばも変わらぬ実情であった。まして中級となると登録者自体，片手の指で数えられる程度しかいなかった。

１，２年生で選択したり，あとまで授業に出てくるというのは，在日コリアンの学生が多かったように記憶する。卒業後，いくつかの高校で非常勤講師として勤務，2000年に延世大学語学堂に私費留学し，2001年には本学大学院に入学予定の金良淑さんや，法学部で1998年から延世大学に交換留学，現在は東京大学大学院に在学中の崔徳孝君らは，自由選択の時代に学んだ人たちである。

選択必修化で学習の前提条件は大幅に改善された。朝鮮語履修者は，法学部・文学部で１クラス，経済学部・社会学部で１クラス，コミュニティ福祉学部・観光学部で１クラスとなっている。履修者数は法・文と経・社が20人台から30人台，福・観が10人台で，年によって多少増減がある。他大学でも継続的に朝鮮語を教えている高成鳳さん（経・社担当）によると，興味深いことに立教で選択者がふえる年は他大学でもふえ，へる年は他大学でもへる傾向があるという。

2001年３月には選択必修の一期生を送り出すことになる。４年間の経験についてここで簡単に整理しておきたいと思う。

朝鮮語授業の概要

本学には朝鮮語の専任がいないため，非常勤講師だけで授業を分担し合っている。この間の分担は2001年の予定を含めると表1のとおりである。

表１　朝鮮語担当教員一覧

	法･文	経･社	福･観
1997	石坂浩一	高　成鳳	――
1998	１年生 姜　恵禎 ２年生 石坂浩一	高　成鳳	石坂浩一
1999	石坂浩一	高　成鳳	前:姜　恵禎 後:布袋敏博
2000	石坂浩一	高　成鳳	布袋敏博
2001	石坂浩一	高　成鳳	金　恵媛

1999年には福・観を担当していた姜恵禎さんが健康上の都合で前期までで仕事を辞退されるというアクシデントがあった。1998年に新学部が設置され福・観の朝鮮語の授業も始まったわけだが，結果としてここは毎年教員が交代することになってしまった。学生諸君にはとまどうところがあったかもしれない。

教員は，姜恵禎さんと金恵媛さんがネイティブの韓国人，高成鳳さんが在日コリアンで朝鮮高校出身，布袋敏博さんと私は日本人で，学習したのは韓国ベースとなっている。日朝国交が正常化していない状況では，これはよいバランスなのではないかと思われる。

朝鮮語教育はこれまで教授法の研究もあまり進んでおらず，専門の人材も多くないため，他分野の研究者によってなされることが多かった。本学の場合，高さんは経済史，金さんは社会福祉が専攻である。布袋さんは朝鮮文学，姜さんはやはり社会福祉専攻だが韓国語会話の著書があり，私はもともとは歴史学専攻だが90年代は韓国の現代社会・文化に主な研究対象を移し，小説の翻訳なども行なっている。高さんと金さんも他校で朝鮮語を教えるなど，言語教育への熱意のある方々である。言語の研究者がよい言語教育ができるとも限らないわけで，その意味でも経験を総括する時期であろう。

授業時間数は１年生は週２回（１年で４単位となる）だが，２年生は週１回。ただし，法・文は週２回選択が可能で，２年間の初習言語単位が８単位取得者と６単位取得者にわかれる。ところが，法学部は2001年度からはすべて６単位となるとのことなので，文学部だけが８単位取得が可能になる。

表２　朝鮮語授業時間（週当り）

	１年次	２年次	３・４年次
法･文	2	1 2	池袋演習１
経･社	2	1	
福･観	2	1	新座演習１

３年生以上は1999年度から「朝鮮語演習」（2001年度からは「朝鮮語セミナー」と改称）を履修できる。これは池袋・新座キャンパスにそれぞれ週１回ずつである。

法・文の学生の場合，朝鮮語を６単位とするか８単位とするかは入学時に登録する。これについては私の担当し

たクラスで，選択を二年次の初めにできるようにしてほしいという声を聞いたことがある。

これまでのテキスト

授業を行なうにあたって最も頭を悩まされるのがテキストの選択にほかならない。私は1990年代の前半は渡辺吉鎔『はじめてのハングルレッスン』（講談社，1986年）を採用していた。週１回の自由選択の授業ではもちろん１年間でテキストを終えることはできないが，それはどのテキストでも同じだった。このテキストを使ったのは，会話体が基本になっていること，カタカナのルビがなく発音記号が丁寧に付けられていることからだが，問題点も少なくなかった。

1997年度以降，各教員が採用したテキストは表３のとおりである。

表3　使用テキスト一覧

使用者	タイトル	著者	発行所	発行年
石坂	朝鮮語を学ぼう	菅野裕臣監修	三修社	1987
高	新しい朝鮮語	塚本　勲 奥田一広	白帝社	1989
姜	やさしい韓国語講座	李　応寿	語研	1991
2000年度共通	ｶﾅﾀﾞKOREAN	ｶﾅﾀﾞ語学院	時事エデュケーション	1997

福・観で毎年教員が交代し対応に苦慮したのを教訓とし，2000年度には３クラス共通のテキストを採用した。それが，韓国から取り寄せたテキスト『カナダKOREAN』で，私がソウルで買い付け郵便で学校に送り，教室で実質頒布した（2000年の場合，900円で，値段が高くないのも辞書の高価さを考えた場合の魅力だった）。

表３のテキストについて簡単にコメントしておこう。私の使っていた『朝鮮語を学ぼう』は文法の固まりのような本である。よくあれで授業をしている，と友人に驚かれたものだ。この本は会話の練習はいっさいない。従って，例文，練習，必須単語などはすべてプリントで行ない，テキストは説明のみに使った。項目立てが細かく文法的にもれがないのがこのテキストの長所である。ただ，教科書というより参考書というおもむきであるのは事実だ。1999年から2000年にかけて延世大に交換留学した法学部の高橋はるかさんは，語学の授業で習ったことや韓国人と話していて出てきた言い回しを確かめるのに役立ったと語っていた。

『新しい朝鮮語』は説明はシンプル，158ページの中にひととおりの文法事項が組み込まれており，北朝鮮での発音やつづり字についてていねいに述べているところが長所である。授業では教員の裁量の幅は広い。欠点は本文が長いし，その内容が固いということだろう。日常生活で使いそうな語いが少ない。

『やさしい韓国語講座』はなかなかよくできたテキストといえる。本文もいい。しかし，この本文は長すぎるので，263ページ，30課のテキストだが本文をていねいに扱っていると週２回の授業で１年に10課くらいしか進めないであろう。1998年入学の法・文の２年

生を姜さんのあとを受けてこのテキストで教えた時は，本当になかなか進めずに苦労した。

日本で制作されたテキストは１冊の中に基本的な文法事項をすべて詰め込んだ上に，けっこうな量の本文がのっているので，２年次の週１回の授業までを全授業として（約70回くらいになろう）も，１冊を終えるのは骨が折れる。別に終わらなくてもいいという考え方もあろうが，活用がよく理解できておらずろくに辞書も引けないまま終わるのは，私としては残念なことである。

2000年度に採用した『カナダKOREAN』は全25課，各課の本文は２人の登場人物が２回ずつ語る短いもので，これまでのネックを解消できる統一テキストにできるかもしれない，と考えて採用してみた。結果的に，基本的なパターンをシンプルな本文を通じてマスターするという狙いは当たったが，いくつかの問題点も生じた。このテキストは延世大の語学堂で教えていた人たちが設立したソウルのカナダ語学院の制作したテキストだが，毎日（週５日）通学して言葉を習うシステムを想定している。私たちはこのテキスト１冊を１年かけて学習するのだが，それでは練習問題などはこなしきれない。また，韓国の中で韓国語にひたりながら学ぶのでテキストには遠慮なくたくさんの単語が出てくるが，これも日本で学ぶ条件には合わない。ある意味では編集上のミスだろうが，学んでいない事項が突然登場することもあった。

いろいろ試行錯誤してきたが，結局，日本で週２回の授業のための朝鮮語テキストを新たに作るしかないということであろう。

朝鮮語教育の最近の傾向

近年，高校でも第二外国語として朝鮮語を学べるところがふえつつある。立教高校はそのいい例だろう。高校の授業の場合，使いこなせるようになることより，「親しむ」ことに重点を置いている場合が少なくない。韓国・朝鮮に接する機会が従来は多く提供されなかった社会状況からして，当然な流れにちがいない。

高校の朝鮮語教育は自由にできる幅があることから，教授法について新たな試みを行なうところもあるようで，ネイティブの韓国人による直説法（韓国語による）教育の試みも耳にした。おそらく，英語教育法での新しい流れとも軌を一にすることであろう。また，文法事項をあまり詰め込むな，というのもよくいわれることである。高校の朝鮮語も，たとえば60分の授業が週２回ある場合に使いやすいテキスト，というと全く見付からずに，自主教材で実験を繰り返しているところだ。

ひるがえって韓国を見ると，ここ２，３年のあいだに韓国語の外国人向けテキストの新しいものが次々と出版されている。中国人向けのテキストが多いことにも象徴されるように，韓国への移民労働者の増加やグローバリゼーシ

ョンを背景にしたできごとである。梨花女子大学言語教育院の出したテキストなど，カラフルかつビジュアルで，かなりこった作りになっているし，延世大学語学堂『韓国語』全６冊の少し古めかしい感じの本文と比べると，方法的にも内容的にも隔世の感がある。私たちとしては，こうした韓国での成果を活用しつつ日本での条件に合ったテキストを生み出していきたいものだ。

その意味では，早川嘉春『メモ式朝鮮語早わかり』（三修社，1997）は早川先生のフェリス女学院大学における教育経験をもとに書かれた魅力的なテキストである。このテキストの場合，二色刷が非常に効果的だ。ただ，フェリス女学院は授業時間数が多くインテンシブクラスも設けられており，慶應藤沢キャンパスほどとはいわないまでもかなりよく勉強できる条件が整っている。

一方で，一橋大学や創価大学のように，１年次に週１回の授業を選択するだけで言語科目の選択必修単位が埋まるという大学では，朝鮮語の受講者が数百人にもおよぶという現象もある。初習言語の教育について，どんな目標を設定し日常的に自覚しつつ教授するかがあらためて問われていると考えられる。

会話中心だが文法の骨格も

表４は私が1999年度１年生を対象に行なった授業の記録をまとめたものである。テキストは『朝鮮語を学ぼう』を使っていた。事項の配列や文法的な用語はこのテキストにならっている。基本的な流れを整理してみよう。前期は文字と発音を終えたあと，簡単な自己紹介と過去形までマスターする。後期は過去形の活用をふまえて，３つの語基や～●語尾，変格活用，連体形を学ぶ。後期に学ぶ事項が多いが，次の段階に進んだ場合もくり返しトレーニングをすることでマスターをめざす。11月に辞書を使い始める。

１年間で基本的な事項をひととおり終えようという目標のもとに授業を進めた。学習した事項が会話練習などで生かされるように努めたつもりである。この学年の場合，非常に能力の高い学生が複数いて盛り沢山な感じになったが，1997年度の法・文の1年生の進度とほぼ同じで，無理なものではなかったと考えている。

パターン的には文法事項を積み重ねることでカリキュラムの目安を作るが，その実践は授業中の会話練習を通して行なう。だから，実際の授業そのものはしゃべっている時間が多い。

現在，2001年度に向け制作中のテキスト『RIKKYO KOREAN』は，おおよそこの1999年度の進度で，各課の本文は短かめに，かつ応用のきくような構成にしたいと考えている。本文・例文や単語は，これまでの授業でもそうだったが，たとえば学生たちが短期留学した時にいちばん使いそうなものにしていきたい。

表４

１９９９年度　朝鮮語初級　進行記録

前期

1	オリエンテーション		
2	文字と発音(1)	反切表前半	
3	文字と発音(2)	激音	
4	文字と発音(3)	濃音と終声	안녕하세요?　나는　～라고 합니다
5	文字と発音(4)	終声と複合母音	
6	あいさつ	発音復習	かんたんなあいさつプリント
7	あいさつ・漢数字	漢数字と発音の注意	～月～日の練習，誕生日をいってみる
8	自己紹介	終声の整理・助詞	自己紹介のプリント，書き取り
9	自己紹介	激音化	
10	小テスト	鼻音化	
11	～ ㅂ니다、습니다	鼻音化・流音化	母音語幹と子音語幹
12	～ ㅂ니다、습니다	ていねいな言い方の練習	ㄹ語幹、있다のいろいろな使い方
13	否定形（아니다、않다）	濃音化	ていねいな言い方の復習と書き取り
14	疑問詞と疑問形	否定形の復習で慣れる	
15	総復習（プリント）		
16	総復習（プリント）		
17	小テスト		
18	過去形（プリント）		
19	過去形（応用プリント）		基本的動詞 25語で
20	過去形（応用プリント）	過去の否定	くり返し練習，書き取り
21	過去の否定・疑問（プリント）		
22	未来形	意志・推測・ていねい	

達成目標

1）簡単な自己紹介ができるようになる

2）過去・未来形までいえるようになる

後期

1	連体形(動詞)説明		会話プリントNo.1
2	連体形練習		会話プリントNo.1小テスト, No.2練習
3	同上, 形容詞の連体形	形容詞単語 20語	ㅇ語幹、ㅂ変の形容詞も入れる
4	同上練習、ㅇ語幹	～고 싶다	
5	連体形一覧表作り		会話プリントNo.2小テスト, No.3練習
6	～요の語尾、3つの語基	応用の文章作り	3つの語基はここでいったん説明, あとは各語基
7	～요　一覧表作り	応用の文章作り	会話プリントNo.3練習
8	서と니까	応用の文章作り	固有語の数詞
9	서、니까、면の練習	応用の文章作り	会話プリントNo.3小テスト, No.4練習, 固有数詞
10	敬語시と세요		固有数詞を文と組み合わせ応用
11	시と세요 練習	応用の文章作り	会話プリントNo.4小テスト, No.5練習
12	敬語復習、ㅂ変		小テスト
13	会話テスト		会話プリントNo.5小テスト, No.6練習
14	辞書を引く練習、ㅂ変	まとめ的会話練習	ㅂ変練習
15	第Ⅲ語基＋있다	辞書復習	
16	ㄹ 수 있다(없다)、ㄷ変	第Ⅲ語基＋있다 復習	会話プリントNo.6練習
17	可能不可能、ㄷ変復習		日本語に辞書を引いて訳す宿題
18	야 되다(하다)	ㄷ変復習	会話プリントNo.6小テスト, No.7練習
19	ㄹ変、ㄹ正、러変		訳の宿題 答合わせ
20	総復習(プリント)		会話プリントNo.7小テスト, No.8練習
21	総復習(プリント)		訳の宿題つづき
22	ㅎ変		会話プリントNo.8小テスト, ユンノリで遊ぶ

※火木のうち火曜に会話プリント

達成目標

1) 連体形
2) ㅇ語尾
3) 変格活用
4) 会話能力
5) 辞書の慣れ

２年次以上の学習内容

２年次以上になると，立教の朝鮮語履修者のほとんどは，朝鮮語の授業は週１回しかなくなる。学生にとって，週１回でたくさんのことをマスターするのはむずかしいだろう。２年次以上をどう教えるのかは私もまだ自信をもって語れない部分が多い。とりあえず，これまでの経験を述べよう。

1997年入学の学生たちが２年生になった際に，教材として会話のプリント全18課分を作成，通訳をする加藤美蘭さんの協力でテープを録音した。基本的には，なるべくたくさん声に出してみることが週１回の授業では重要と考え，この会話プリントは2000年度の２年生に至るまで，よく活用した。このプリントは朝鮮語だけなので，辞書を引くのも学習の一部をなす。ただし，最初の年の経験で，10課をすぎると急にむずかしくなるという意見があったので，このところはゆっくり進めて第12課くらいまでしか進まないことにしている。

読むことについては，文字を通しても会話体を身につけるという趣旨で「パンチョギの家族日記」「クァンスの考え」などマンガを使ってみた。また，雑誌の記事の長くないものを教材としたこともある。「パンチョギ」は音読の教材としてもよく，他のマンガより言葉づかいも穏当なので，私としてはいい教材と考えている。

聞く面ではこれまで，２年生（８単位履修者）から演習にかけて「接続」「８月のクリスマス」といった映画や人気テレビドラマ「RNA」を教材にしてみた。語いが少ないので聞くことに慣れるのが趣旨である。知っている単語も，一連の会話の中に入ってしまうと聞き取れないことが多い。それで，普通の会話に慣れるためにこの聞き取りをしてきた。音が聞ければいいので，意味まで聞き取ることは要求しない。こういう方法がいいのかは私自身，まだ結論を出せていない。だが，それまで１年次で基礎を固められたとすれば何としゃべったのかをみんなで推測し合うというような「親しむ」モードがあってもいいのではないか，と思う。

書く面は一番むずかしい課題である。これもまた語いの少なさがネックだ。基本的には自己紹介を書いてきて，かわるがわる発表しては添削するというのが毎年必ず演習レベルで行なう学習方法である。2000年度の２年生は日本のテレビドラマ「天気予報の恋人」のシナリオのセリフを韓国語にするという作業をやってみた。私があらかじめ韓国人の友人に韓国語訳を作ってもらう。学生たちは日韓辞典を引いて苦心して作文するが，これはあまり会話の形になっていない。パンマル（ぞんざいな言葉づかい）を使いこなすのは２，３年生の実力では無理がある。それで学生たちの作り上げたものと，韓国語らしい韓国語とのちがいを自覚してもらうという作業だ。これは高度な作業で，この学年限りのことになろう。今

後の方法上の研究を期したい。

むすび

今後，少しずつ朝鮮語選択者はふえていくものと思う。語学教育とは直接関係ないことだが，このところ気付かされることがふたつある。ひとつは，日本の名前を名乗っているが（学生のうちはまだ二重国籍で日本の親の戸籍に入っている場合が多いのだろう）両親が国際結婚で片親はコリアンであると自己紹介する学生が目立つようになってきたことである。朝鮮語クラスには毎年必ず，そうしたダブルを含む在日コリアンの学生がいるものだが，自分からそれを言う者がふえているような気がする。もうひとつは，韓国人の友だちがいるので勉強する気になったという学生も少しずつふえていることだ。これは，その友人が在日の場合とネイティブの場合との両方がある。いずれにしろ，出会う機会が多くなっていることは喜ばしい。言語を学ぶことが一層のコミュニケーションにつながってくれればと思う。

朝鮮語が選択必修化されてから，1997年入学の法学部学生が1999年夏休みにカナダ語学院に１ヶ月，1998年入学の経済学部学生と1999年入学の法学部学生が2000年夏休みに延世大学語学堂に３週間，それぞれ私費で短期留学をした。このうち99年入学の法学部学生は2001年度の交換留学生として延世大学に派遣されることになっている。1998年入学の法・文の学生たちは１年生の時は姜さん，２年生の時は私が担当して，語学の面ではやや不充分なところがあったように思うが，２年生の９月にソウル旅行というプラスアルファのサービスがついた。

韓国は近くて経費もかからないので，今後短期語学研修も自由科目の一部にとり入れられるように努力していきたい。現在，韓国への派遣留学は延世大２人，聖公会大１人の枠があるが，聖公会大はいまだに日本からの申請実績がゼロという実情である。学生たちにとって，もっと韓国が身近になり，短期研修も行なわれて，早く聖公会大に学生を送り出したいと思う。そのための授業の充実と朝鮮語学習環境の改善が今後の私たちの課題である。

（いしざか　こういち　全カリ非常勤講師）